

# UCG STAFF CAR REPORT

ボルボS60Rが我々の手元にやってきてから、早いものでもう半年が経過した。微細なことまで含めまったくのノントラブルで日々を過ごしているが、今月は一風変わった1日があったのでその様子を紹介してみたい。

2004年 ボルボ S60R

6ヵ月 14,150km+8,518km

第6回



## 遠くへ行きたい!

スタッフカーというのは、つまりは編集部員のアシ代わりである。ショップ取材や印刷会社/デザイン事務所との往復、そして担当者の通勤と、基本的には都内を徘徊することがほとんどだ。

しかしこのボルボS60R、そんな使い方で持てる能力を堪能できるような、ちんまりとしたキャラクターのクルマではない。300psの

ハイパワーがもたらす直線的な加速や大陸的な高速巡航こそ、真骨頂。都内雑踏ではいかにもフィールドが小さすぎる。

そんなわけで日々悶々としていたところへ、思わぬ理由で郊外へ脱出するチャンスに恵まれた。

事は山田記者がランチア・イプシロンを購入したことに始まる。マイカーレポート(120

ページ)にもあるとおり、MT及び左ハンドルの練習用である。つまり彼女は、納車時点ではイプシロンの運転がままならないのだ。だから家まで持ってきて、と彼女は宣うた。まさか仕事にそんな私用はできないので、諸所調整のうえ連載関係の撮影を手配。めでたく納車当日を迎えることになった。以下はそんな一日の実況である。

## 久々に高速道路を疾走

ボルボS60Rに乗って朝10時に世田谷のイタフラ専門中古車店「コレツィオーネ」へ。山田記者がイプシロンの書類チェックやクルマの説明を受けている間に、私は潇洒な商談ルームを借景して「スーパーカー点描」(110ページ)の撮影を済ませる。

昼前に同店を出発。晴れて山田記者のものとなったイプシロンだが、初ドライブは私だ。山田記者はS60Rで後を追う。ATでさえあれば、彼女の運転はなかなか堂に入っている。

イプシロンはなるほど事前に聞いていたとおり、エンジンの吹けは軽く、足回りやダッシュボードからのガタピシ音も少なくコンディションは良さそう。しかし数日後、一寸不動になったという。軽微な電装トラブルに過ぎなかったようだが、中古車選びはこれだから難しい。

2台は渋滞をすり抜け都内を脱出。関越道を北上した。とはいえ目的地はたかだか50km先、嵐山小川インターである。関越道を降りてほどなく、「割烹旅館 二葉」へ到着。「クルマで行ける CAFE&RESTAURANT」(112ページ)の取材である。このページの担当は山田記者なので、私は昔懐かしい数寄屋建築を気楽に見学。でも「忠七めし」だ



山田号陸送中の図。美しいインテリアだが、比較的涼しい日だったにもかかわらず冷房はぬるく、暖房にするほどにクーラントの蒸り……。[いいのいいの。カタチがキレイだから]とオーナーは暢気なもの。

けはしっかりいただいていた。

彼女の家はこの近所。無事にお役ご免といきたいところだが、当ページの写真も必要なので、30分ほど走ってライン下りで有名な長静へ。到着した頃にはすっかり日も落ちていたが、五條カメラマンがスローシャッターで素敵な写真を撮ってくれた。その後、彼女の家に無事イプシロンを届け、お役ご免と相成った。

帰りはボルボS60Rで闇の関越を疾走。猛烈だが直線的でスムーズな加速力、段差

でこそやトゲトゲしい挙動を見せるものの基本的にはフラットな乗り心地、そしてしっかりと体を支えるシート……ボルボS60Rの持つ大陸的な魅力をたっぷり味わうことが出来た。ブルーの照明によってソフトに浮かび上がる計器類は大口径で視認性に優れ、キセノンヘッドライトと相まってドライバーを疲れさせない。本当はもっと遠くまで走りたかったのだが、ボルボの魅力は長距離行でいっそう花開くのである。

Text: 加納亨介/Photo: 五條伴好



長静ライン下りの船着き場にて。夜間に霞むせせらぎに、S60Rの流麗なボディラインが溶けこむ。ボルボが言うところの「4ドア・スポーツクーペ」は、リアからの眺めが最も美しいと思う。ダッシュボードは基本的な造形こそ他のグレードと変わらないが、「R」はご覧の通り計器類がブルーに浮かび上がる。大口径のメーターダイヤルとあいまって視認性は良好だ。